

## 岩手県立博物館の現況と自然史系博物館（部門）のあり方

岩手県立博物館 主任専門学芸員 大 石 雅 之

### はじめに

岩手県立博物館が昭和55（1980）年に開館してから、今年（平成8年、1996年）で満16年になる。東北地方では山形、青森、秋田に次いで4番目に開館した県立の総合博物館であり、歴史はまだ浅い。しかし、昭和50年代以降全国各地に次々と新しい博物館が開館していく中で、現在の日本の博物館をとりまく環境は、岩手県立博物館が開館した当時とは比べものにならないくらい一変している。

この小論では、東北地質調査業協会の協会誌という本誌の性格上、岩手県立博物館の概要に関して地質部門を中心に紹介するとともに博物館、とくに自然史系博物館をとりまく情勢についても、考察を進めてみたい。

### 博物館の概要と地質部門の展示

岩手県立博物館（写真1）は、もともと歴史博物館としての性格を軸に、近代美術と自然史系の部門をあわせもつ総合博物館として設立された。そのため、地質学や生物学を含む自然史系の展示室の占める割合

は少ない。なお、美術系については、県立美術館が平成12（2000）年度に開館する予定であり、この部門の独立がすでに決まっている。岩手県立博物館についての概要は、かつて筆者は古生物学会の邦文誌に紹介したことがあるので（大石、1984）、それも参考にされたい。この博物館の活動の内容は、調査研究事業、資料収集保管事業、展示事業、そして教育普及事業の4つに分けられる。これらの活動については、筆者が担当して出版された開館10周年記念誌（岩手県立博物館、1990）に詳しい。

さて、岩手県は地質学的には東北本州弧の外帯と内帯にまたがり、中・古生界からなる北上山地と新第三系や第四紀火山が分布する脊梁山脈を擁している。そのため、全国の中でも地質学的にきわめて多様性に富む地域といえる。岩手県立博物館の地質部門のスタッフは2名（これまでに計5名が歴任してきた）であるが、こういった背景を踏まえて、できるだけ多種類の標本を展示するように努めている。

展示室は、時間の流れに沿ったストーリーの「総合展示室」とやや専門的な「分

類展示室」に分けられている。地質部門の「総合展示室」は「県土の誕生」のテーマ名で呼ばれている。考えてみれば、4億年前から現代までの時間の中で、この地に人間が住みつく以前の99.99%の時間を指して「誕生」と呼ぶのも強引な話ではあるが、一般の人の感覚からみれば、「誕生」でも違和感はないのであろう。

「県土の誕生」の展示室は、糸魚川（1993）も指摘しているように、地質や化石のメッカの岩手県としては、狭いといわざるをえない。平成元（1989）年には、展示室の一部を模様替えし、プレートの沈み込みを示した東北地方東西断面模型（写真2）と北村 信東北大学名誉教授監修の岩手県地質図が新設された。地質図の前には、岩手県の代表的な岩石や鉱物が展示されている。また、南部北上山地の古生代の三葉虫やサンゴ化石、宮古から久慈地域の白亜紀のアンモナイト等の海生無脊椎動物化石、二戸地域の中新生世の貝類やカニ化石、零石地域の魚類や昆蟲化石などが展示され、時空的に多様性に富む地質を反映したさまざまな分類群の化石が紹介されている。

しかし、博物館の展示の中では、なんといっても復元して組み立てられた大型脊椎動物化石の骨格の人気が高い。昭和55年の開館当初、組み立てられた骨格標本（複製）といえば、鮮新世のミズホクジラ（前

沢町産）と更新世のハナイズミモリウシ（花泉町産）の2体（ともに実物は国立科学博物館所蔵）だけであった。しかし、その後岩手県立博物館では新たな発掘の機会に恵まれ、中新世の東柱類（二戸市産）、鮮新世のマエサワクジラ（前沢町産）、ミズホクジラ（一関市産）、ヒライズミイルカ（平泉町産）などの骨格標本が展示につけ加えられた。展示標本は複製で、実物は普段は収蔵庫に保管されている。また、恐竜としてはわが国ではじめて発見された白亜紀のモシリュウの上腕骨（岩泉町産；複製）に関連して、今年になって同じ竜脚類のアバトサウルス上腕骨（アメリカ産；実物）が併設され、マイアサウラの幼体の全身骨格（アメリカ産；複製）もお目見えした（写真3）。これらの骨格標本は従来の展示室の中では当然スペースが足りず、一部はホールにはみ出して展示されている。

分類展示室では、「南部北上山地」「三陸海岸」「岩手山とその周辺」をテーマに、それぞれ古生代、中生代、新生代の化石や岩石を展示している。また、今年は明治29（1896）年に真昼岳付近を震源とする陸羽地震が起きてからちょうど100年目にあたりが、このときに活動した川舟断層のはぎ取り標本も展示されている（写真4）。これは、平成元年に電力中央研究所がトレーニング調査を行ったときに収集したものである。

屋外には岩石園が設置され、県内産の約50種類の岩石標本が配置されている。

企画展は年2、3回ずつ行われ、地質部門では、これまでに「石灰岩」「北上山地の恐竜・アンモナイト」「鯨と海獣の歴史」「南部鉱物標本」そして「化石にみる自然誌」をテーマに開催してきた。企画展は、開催し終わるたびにその一部が常設展示に組み込まれて展示の充実が計られれば、理想であろう。

展示を観るために岩手県立博物館を訪れた総入館者数は、平成8年3月31日までに1,911,912人に上る。しかし、この数字は決して多いものではなく、また、年間入館者数も毎年減少しつつある。盛岡市の中心部から遠い郊外に立地していることがその一因とも考えられるが、日本の多くの博物館がそうであるように、観光施設的利用のされかたと、それを意識した展示づくりも入館者数の伸び悩みの原因になっていないだろうか。

#### 事業活動とそのあり方

展示活動は博物館の顔として一般来館者に接する部分であるが、これを補って講演会、観察会、セミナーなどの学習の場を提供するのが教育普及活動である。地質部門では毎年2回ずつ地質観察会を実施しており、これまでに30回を数えた。内容は化石

や鉱物の採集が多いが、28回目の松尾鉱山新中和処理施設と松川地熱発電所の見学はやや異色のプログラムであった。

ところで、一般来館者からの質問や手紙による問い合わせの回答、持ち込まれた標本へのコメント、あるいはマスコミへの学術情報の提供などは、行事計画に現れる活動ではないが、結果的には効果的な教育普及活動になっていると思われる。しかし、突発的な対応と計画的な日常業務との調整は、学芸員にとって意外に容易ではない。1つの電話から始まって、大きな事業へと発展する可能性さえ大いにありうるからである。

展示活動や教育普及活動は、調査研究活動が進展しているテーマであればスムーズに遂行させることが可能である。しかし、最も時間を必要とする調査研究に充分な時間を確保できないのが、地方博物館の学芸員に共通した悩みであろう。そのため、展示や教育普及事業の準備は、実際には泥縄的になることが多い。専門分野の活動では、歐米の博物館のように、本来研究者を支える技術者の存在が不可欠なのであるが、各活動を無理なく遂行させるのに充分なスタッフに恵まれた地方博物館は、日本では皆無であろう。

一般的に、博物館活動の中の調査研究活動の重要性については、かつてにくらべる

とかなり認識されるようになってきた。しかし、多くの地方博物館で、まだまだ正当に評価されているとはいがたいだろう。岩手県立博物館では、数年前に調査研究活動に関してわずかながらの改革が行われ、地質部門ではそれまでなかなか着手できなかつた地域地質調査が可能になり、北上低地帯の研究にさきやかな貢献をすることができた（大石ほか, 1996）。この研究は、もともと解決すべき課題と考えていたテーマでもあったが、アマチュア化石研究家が足跡化石を発見したことに端を発して予算がついたもので、その化石研究家はそれ以前に地質観察会に参加してこの分野への興味を深めたのであった。

大場（1991）は、地域自然誌（史）博物館の抱える諸問題を論じる中で、学芸員にはナチュラリストであること、地域自然誌および専門分野のオーソリティであることを見み、地域博物館は視野の広い自然誌研究者の創生のために有効であると述べている。研究活動はそれぞれの学芸員の専攻に基づくもので、多分に属人的な仕事であり、奥深い専門性を必要とするが、それとともに学芸員には幅広い視野も常に求められている。

調査研究によって収集された標本は、資料収集保管システムにしたがって登録される。しかし、岩塊の中から化石を取り出し

て標本化する、いわゆるプレパレーションの作業は多大な時間を要し、登録に至っていない資料も少なくない。希少な標本の収集は、寄贈に負うところが大きい。また、外部の研究者が収集した標本群の寄贈は、博物館の学術資料の蓄積に大きく寄与する。東北大学名誉教授南部松夫博士が収集して岩手県立博物館に寄贈された鉱物標本は、現在では収集不可能な貴重なものが多い（写真5）。この標本については、学芸員によって6年の歳月をかけて整理され、目録が出版された（吉田, 1994）。

以上述べてきたように、博物館は展示、教育普及、調査研究、そして資料収集保管の4つの活動をバランスよく保ちながら運営していくものであるといわれる。ところで、これら4つの活動の中で博物館の本質を示す活動とはいったいどれであろうか。その答は、やや極端で乱暴ないいかたをすれば見えてくる。つまり、展示は博覧会やデパートのギャラリーでも可能である。教育のためには学校がある。高度な研究は大学や研究所が行っている。しかしながら収集した学術標本を保管して後世に伝えるという機能を有する場所は、博物館をおいて他にはないのでないか。ここでいう「博物館」とは、大学の標本室などをも含めた広い意味での博物館である。したがって、資料の蓄積こそが博物館の本質ではないの

か。

大場（1991）は、博物館が蓄積する資料とその管理体制の重要性を強調している。博物館は第1に「蔵」であることに意味があり、その中の蓄積資料の質と量が充実し、さらに標本の維持管理体制が整っていれば、他の3つの活動を機能させていくことは比較的容易なのである。博物館イコール展示施設という認識ばかりが先行し、馬渡（1994）が指摘するように、社会教育と強く結びつくという特異な歴史をもつ日本の博物館の現状の中では、オランダのライデン自然史博物館のように展示室をもたない研究博物館の存在は想像を絶することかもしれない。自然史博物館は、自然のシステムを理解するための標本の蓄積とその比較の場を有する研究機関であるべきである。これに関連して、プレストン（1991）は、アメリカ自然史博物館の古生物学者の言葉を次のように引用している。

「私たちが骨を集めるのは、『事実』の図書館をつくりたいからです」

ところで、日本の多くの博物館の学芸員に課せられた仕事は、実は前記の4つの活動にとどまっていない。各部門の専門職としての仕事のほかに、一般行政職的な仕事の占める割合も多いのである。学芸員は、専門分野の教育を受けて配属された専門職である。学芸員に専門分野での力を發揮さ

せることが、もっとも効率の良い博物館の運営につながり、そのことにより博物館の質的向上が期待されるのではないか。

### おわりに

関東地方では、今秋で1県を除いた各都県に自然史博物館が出そろうことになる。東北地方では仙台に斎藤報恩会自然史博物館があるが、県立の自然史博物館は皆無である。自然史博物館は、人口が多い都会ほどできやすいのだろうか。

この小論では、岩手県立博物館の地質部門の展示ガイドという内容にとどまらず、比較的入手しやすい文献を引用しながら、博物館の現状やそのあり方などについて考察した。筆者は、特に大場（1991）の指摘しているような議論が今後深められることを望んでいる。なお、筆者はまた、これから自然史系博物館は、人と自然の相互作用、特に地質学の中では応用地質的分野も強化される必要があるのでないかと考えている。

### 文 献

- 糸魚川淳二, 1993, 日本の自然史博物館. 東京  
大学出版会, 228p.
- 岩手県立博物館, 1990, 岩手県立博物館10年の  
あゆみ—開館10周年記念誌—. 財団法人岩手  
県文化振興事業団, 213p.

馬渡峻輔, 1994, 動物分類学の論理—多様性を  
認識する方法—. 東京大学出版会, 233p.

大場達之, 1991, 地域自然誌博物館の役割. 月  
刊地球, 13, 697-702.

大石雅之, 1984, 岩手県立博物館. 化石, no.  
35, 47-49.

大石雅之・吉田裕生・金 光男・柳沢幸夫・杉  
山了三, 1996, 北上低地帯西縁に分布する鮮  
新・更新統の地質と年代: いわゆる“本畠層”  
の再検討. 地質学雑誌, 102, 330-345.

プレストン, D.J. (野中浩一訳), 1991, 屋根裏  
の恐竜たち—世界最大の自然史博物館物語—.  
心交社, 386p.

吉田裕生, 1994, 南部松夫博士と南部鉱物標本.  
岩手県立博物館編, 岩手県立博物館収蔵資料  
目録, 第10集, 地質Ⅱ, 南部鉱物標本, 1-8.

#### 岩手県立博物館展示室利用案内

所 在 地／〒020-01 盛岡市上田字松屋敷

34

電 話／(0196) 61-2831

F A X／(0196) 61-2835

開館時間／9：30～16：30（入館は16：00  
まで）

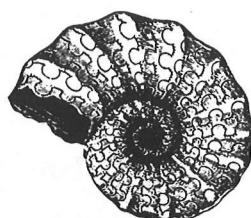
休 館 日／月曜日（月曜日が祝祭日の場合  
は次の平日）・資料整理日（9  
月1日～9月10日）・年末年始  
(12月28日～1月4日)

入 館 料／一 般 280円（140円）

高大生 140円（70円）

小中生 70円（40円）

( )内は20人以上の団体割引料金



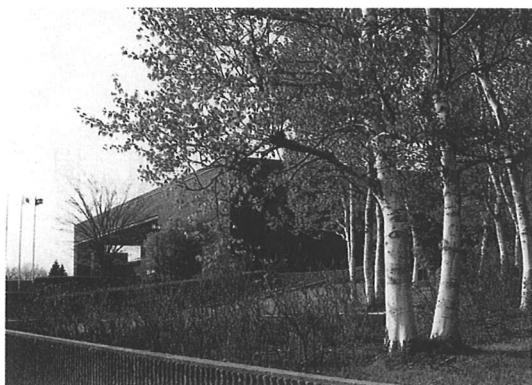


写真1 緑に囲まれた岩手県立博物館

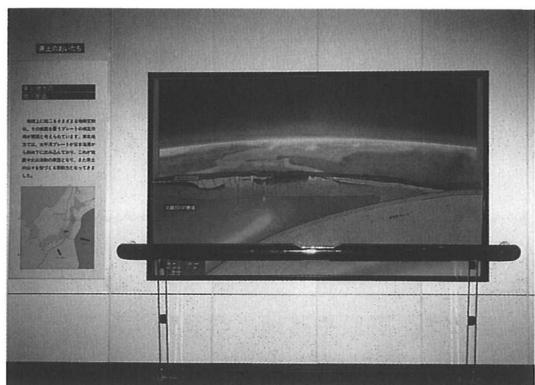


写真2 東北地方東西断面模型



写真3 「県土の誕生」展示室

左下からアパトサウルス上腕骨、モシリュウ上腕骨、マイアサウラ、ハナイズミモリウシ（奥）、東柱類各骨格



写真4 川舟断層はぎ取り標本



写真5 収蔵庫に保管されている  
「南部鉱物標本」